

令和7年度第2回農業大学校外部評価委員会 議事録（要旨）

日時 令和8年2月26日（木）14:30～16:35

場所 大分県立農業大学校 会議室

外部評価委員

大分県高等学校教育研究会農業部会長	佐藤 智之
大分県農業法人協会会長	上原 隆生
大分県指導農業士会副会長	植木 美和
農業大学校同窓会副会長	湯浅 正徳
豊後大野市農業振興課長	赤嶺 繁素
中部振興局農林漁村振興部長	生野 栄城
大分県指導農業士会長	仲井 貞一（欠席）
大分県農業協同組合営農担当・常務	宇都宮 隆一（欠席）

農業大学校

藤田校長、太田副校長、木村次長、兒玉部長、手嶋部長、安達教授

議事内容

- ・報告事項「大分県立農業大学校の運営改善に向けたアンケート結果について」
- ・審議事項「令和7年度重点目標と具体的取り組み結果について」
- ・委員からあった意見等は以下のとおり（○は質問、意見 →はその解答）

報告事項

「大分県立農業大学校の運営改善に向けたアンケート結果について」

～事務局から報告～

○農業高校の生徒に、農業に関心はありますかと聞いたら55%がある、45%はないとの結果に驚いた。昨日の就職相談会の際に色々な農業高校の先生からの話では、農業を希望する生徒がゼロという高校もあった。農業高校生の農業への関心度合いについて、入学時の動機や背景に多様性が見られる。そうであっても高校3年間で農業の楽しさを教えて、農業しようかなと教える教育が農業高校に必要なだと考えている。

→高校生のアンケートでは、農業に関心を持ったきっかけは、祖父母の手伝いをしたことが最も多く、次いで幼稚園、小学校、中学校の時の農業体験の割合が高い。高校に入ってから農業に関心を持った生徒もなかにはいる。幼少期の農業体験や、祖父母世代との交流が農業への関心を深めるきっかけとなるケースも多いことから、幅広い世代へのアプローチが重要である。

また、高校に入学するまでに農業体験をいかにするか、農業現場も教育のところを担ってい

ただいて、きっかけ作りを増やしていくことが1つの方策になるのではないかと。

○農業大学校と農業高校を一緒にできないのか。

○実は10年位前に、新しく農業高校を作るなら県立農業大学に併設して作ったらどうかと提案したことがあった。農大なら食堂がある、寮もある。ちょっと増やしてやればいいし、農業機械も新たに買わなくていい。圃場を共有し、教員もお互いが連携し、農業したらいいのではと提案したができなかった。結局、県庁所在地に新しい農業高校をとということで大分東高校ができた。

○生徒数の減少傾向にある一部の農業高校では、広大な敷地の維持管理や教育資源の最適化が課題となっている。

○ある程度人が多くないと子供たちも魅力を感じないと思う。

○高校の再編がまもなく始まると思う。その中で農業高校自体がどうなっていくか。

→先日、高校の無償化が始まり高校間のバランスが崩れてくることや、これから普通科高校、特に地方の普通科高校が厳しく、就職先もAI等にどんどん仕事が奪われる時代になって、手に職を持ったいわゆる実業系に人材を増やさないといけないと国は考えている。そういう中、工業系高校の高専化や、農業分野でも高大連携みたいな話も出てくると思われる。

○アメリカでは今までプログラマーなどIT関係の給料が高かったが、今は逆転が起きてブルーカラーの給料が段々と上がっている。AIやロボットではなく、手作業でないとモノが絶対できない部分がある。日本でも左官さんや大工さんの給料が上がっているのと一緒に、今からそういう時代に入ってくると言われている。農業でも現場で農作物と直接触れる人材は、間違いなく今から希少価値が出てくる。

○少し気になるのは、農業高校生対象のアンケート、8ページの表15で「農業大学校を知っていますか」との問いで、「知っている33%、聞いたことはある52%、知らない16%」という結果になっている。しかし、農業高校生全員がアグリ創生塾の研修で必ず農大には行くようになっていて、来たことがあるのに半分は聞いたことがあるという答えで、農大に来た記憶がないのか、どういうことかと考えている。農大に来て研修をしているというインパクトがあった方がよいのではないかと。

→農大として認知度を高める努力が必要である。また、農大に進学したい割合は全体で1割程度しかなく、特に、高校1、2年生が低いことから、1、2年生に向けてアプローチしていかないといけない。

○夏休みを利用して実習に来てもらってもよいのではないかと。2泊3日くらいで学生と一緒に

作業してもらおうとか。高校生の農業体験を通じて関心を持ってもらえるよう現場も取り組みたい。

審議事項

「令和7年度重点目標と具体的取り組み結果について」

・運営方針1 活気あふれる学園づくり

【数値目標】基礎学力を備えた入学生60名の確保

～事務局から説明～

○学生をよく集めたという思いだ。高校生も少ない中で46人も受験してくれるのは頑張ったのではないか。

→定数は60名についても課題がある。現在、各学科コースを選んで募集しているので、コースによって募集にアンバランスがある。令和8年度は水田野菜コースが30名と内部で定める数に達していて、一般入試のB日程からは水田野菜コースは募集を停止して、それ以外のコースで募集している。60名の定数を充足するには、組織改正や募集方法の変更などについても、今後、皆さんの知恵を借りながら取り組んでいかないといけない。

○水田野菜は30名ということだが、花き、果樹、畜産は何名受け入れるという定員はあるのか。

→内部で定めている数字は、水田・露地野菜クラスと野菜クラスで15名ずつ、花きが8名、果樹が12名、畜産が10名、合計で60名を目安に受け入れている。応募者の減少や偏りがあると、職員の配置も含めて、運営する上で色々と課題がでてくる。花きコースは今度のC日程で1名の応募があったので今年並みの入学者が確保できるのではないかと思うが、仮に花きの希望者が少なくなったのでやめるといったとき、県として花の生産者の確保がそれでいいのかどうか、農大だけで判断はできない。

○2年生は就職先について何を見て決めているのか。

→一年生の2月に三者面談をして進路を聞いているが、一番多いのは公務員と農協。

○募集のポスターは普通科や工業高校、商業高校にも配布しているのか。高校の生徒にアンケートを取ったら、中学校のポスターやパンフレットを見て知ったという生徒が多かった。普通科でも色々な生徒がいるので有効な方法と思う。

→ポスター、チラシは普通科を含め県下の高校すべてに送っている。また、インスタもフォロワー数が増えているが、農大の魅力を感じられるようなホームページの充実を図り発信できるとよい。

○それでは、自己評価は3であるが、大幅な募集が増加したことから、委員評価としては2としたい。

・運営方針2 質の高い教育の提供

【数値目標】全国プロジェクト発表会出場1課題以上

～事務局から説明～

○JGAPについて、水田だけでなく全体で取り組んだらどうか。うちもJGAPの取組で意識付けが出来てきている。記録をちゃんと残してやることで変わってくるのではないか。うちの若い社員でも変わってきている。記録を取ったりして色々自信を持ってきている。全部の学生にさせた方がよいと思う。農業法人に就職しても、そこはしっかりと生きてくるところだ。

→畜産もJGAP認証を取得しているが継続できていない。GAP認証を取ることが目標ではなく、GAPというものを理解して取り組むことを目標にする必要がある。

GAPを学校として取り組むためR9年度からGAP演習をカリキュラムに組み入れる。今年の水田・露地野菜クラスの学生が主体になってGAPの審査を受け認証が取れた。これからはGAP演習によって学生が自らGAPを理解し、実践できるようになれば、現場が求める人材育成につながると思う。

GAPの審査を受ける場合、普通の会社であれば誰か一人がやれば継続しやすいが、農大の場合、毎年人が変わっていくことから、2年から1年に引き継ぐ体制を目指す考えである。

○久住高原農業高校では、グローバルGAP、アジアンGAP、JGAPの認証を取ってきたが、生徒が入れ替わるのでどうしても教員が中心になってしまう。だから審査には生徒も加わるが教員の負担が大きくなった。結局グローバルGAPは予算が取れなくて諦めて、アジアンGAPで行こうと思ったが、アジアンGAPがなくなるということから、今はJGAP認証を考えている。しかしながら、高校3年間の短い期間で回していくのはすごく難しいと考えている。

ただ、久住高原農業高校でGAPを勉強した生徒が、農業法人に就職して、そこはそれまでGAPが取れなかったが、うちの生徒が入って次の年には取れたということだった。なので、それはそれで効果があったと考えている。法人からはとても感謝された。

一つ伺いたいのは、7ページの(5)、総合経営特別講座について、これはカリキュラムの中に入っていて全員が受けるのか。

→選択制で受ける科目で2年時に成績優秀な学生や自営を目指す学生をピックアップして特別にこの講座をまとめて受ける。

非常に中身のある講座が多いことから、カリキュラムの再編の中で選択科目を見直すことを考えている。

○自己評価は4となっているがその根拠を説明してもらいたい。

→今回、目標を変更して、全国の大会出場を目指したが、今年度は出なかったということで評価4としたところ。

○農業技術検定を受けている学生が少ない。農大に入ってから取った人だけのカウントであれば農業高校から受けている生徒、例えば久住高原農業高校では2年生全員取っているのに、農大に入ってから取ろうと思っても取れない。そこはカウントには入らないのでここは農大で取った数ではなくて持っている学生数にした方がよいのではないかと。数が分からないので評価にならない。

入学当初の所有者と農大での取得者を合わせたものを出してもよいと思う。

→今年度、全国を目指そうということで目標を変えた。結果として目標に届いていないし、プロセスについてもまだ完全ではないと考えている。例えば、取組の中にある全国規模の作文コンクールでは、1名が銅賞の表彰を受けた。この作文は、自分の考えをまとめるきっかけとなり、意見発表やプロジェクト学習、成果発表における校内発表大会、九州大会、全国大会につながっていく。全国につながるプロセスを体系化し、それぞれの取組成果についても評価をしていきたい。

今回、作文について呼びかけたが7名の応募しかないので、カリキュラムのなかに作文の書き方などを講義にすれば、目標に向けた取組になるし、意見発表やプロジェクト発表の仕方、そういうスキルを科目の中に入れることで学校として目指す学生を育成する体系にしたい。今回は、全国を目指す取組の評価が十分でなかったと考えている。

○校長からあったように来年からはプロセスの評価ができるよう取組を進めていくということであり、次回への期待の意味も込めて自己評価と同じく委員評価は4とする。

・運営方針3 農業の担い手確保

【数値目標】 全学生・研修生の進路内定率 100%
就農率 80%以上

～事務局から説明～

→11 ページの(2)の就農率の推移をみると、令和4年から下がってきている。これはコロナ明けで各産業が人材を求めているためと思われる。(1)の卒業生の進路状況を見てもJAや公務員が7名と非常に多い。県も今年から初級の農業の職員募集を始めた。安定した就職先を志向する傾向が強くなっている。

○農業分野においても、若手人材の確保のためには、建設業等他産業の労働環境を参考に、週休2日制の導入や給与体系の見直しといった労働環境改善の取り組みをさらに推進していく必要がある。

○私も農業高校の代表として、農業高校で学んでもらって、農業をしてもらいたいという思いで、新規就業・経営体支援課とも連携して、昨日、一次産業の就職合同説明会を開催し、農業法人30社ほど集まっていた。今まで農業法人の説明会をしても、求人票を出していただけないということがあった。求人が出ないと高校生は就職できない。今年の縛りとしては、高校生に求人を出していただける農業法人ということにした。これがどんどん増えていくと、給料はいくら支給する、休みは何日あると明確にした企業、農業法人さんが今から増えていくのではないかと。集まった法人はそれぞれの求人票を見ることができるので、自分のところと他の法人を比べて段々と改善していくと思っている。改善していく中で、農業を知って農大生や農業高校生が増えていけばよいと思っている。間違いなくこれから農業という産業は伸びていくところなので、ぜひ農大生と農業高校生を就職させていきたいと思っている。

→ぜひお願いしたい。これからは、教育現場と農業現場がつながった取組が必要であることから、高校、農大、振興局が一緒になって農業の担い手育成について話ができるとうよいと考えている。

○農大では農家実習を約3週間されていて、農業高校も1週間程度インターンシップや農業法人での実習をしているが、そういうことをもっとすると就農が増えていくのではないかと。

ヨーロッパのドイツ、フランス、イギリスではデュアル教育、企業研修ということで、企業と連携して小学校の時から子どもを育てている。地元の企業を知り、農業や工業など地元にある色々な産業の企業に若者が就職している。ドイツはそのマイスター制度がうまく確立しており、EUの中でも経済が良い状況ということだ。なので、ヨーロッパの色々な国がドイツのデュアル教育であるマイスター制度をどんどん取り入れている。日本は未だに22歳まで普通に勉強して、やっとそこから仕事を考える。せめて農業分野だけでも、高校から農業法人と連携して週に何日かは生徒が農業法人で実習できる体制を作ってもらいたい。農大生も3週間だけではなく、農業法人に行った時間は単位で認めてくれればよいと思う。農業法人を知りそこに行こうという教育ができていくとよい。新しいことではなくヨーロッパではやられていることだ。

→農業法人や農家の方たちが、農業高校などの地域の子供たちに、農業のすばらしさや地域に戻ってきてもらいたいという話をしてもらおうと、地元に戻ってくるようになると思う。

○学校、農業法人、農家さんが一緒に子どもを育てるという教育ができていくとよい。

→研修部では集落営農コースが昨年度から始まって、今年度の研修生2名のうち1名が法人に就職した。あと1名は親戚のところでは就農を決めていて、それに向かっていくステップとして農大の研修部で野菜の栽培や機械の資格を取って基礎を学んでもらった。そのような事例をどんどん増やしていきたい。ただ課題として、期間が短い中どうスキルアップしていくか。

今年の研修生に聞くと農家研修はすごく勉強になったが、野菜コースと同じ1週間では短いという話だった。現場の豊後大野市の農家の方にもう少し長く研修を受けさせてもらいたい。またどうしても学校の中で教えられることには限りがあるので、早いうちに現場でのやり方や

課題、取組などを見せてもらいたい。

先週、豊後大野市集落営農法人協議会の集まりで、研修を充実させていきたいので来年から現地研修の受入をお願いしたいと話をさせていただいた。農大を經由して現場で活躍できる人材を確保・育成していくよう研修のやり方を見直していきたい。

○今後とも連携を進めていきたい。

→ピーマンのファーマーズスクールの方に来てもらって、研修生がそこに行ったという経緯がある。そういう産地からの引きをお願いしたい。ここには実際に就農を目指す研修生がいるのでぜひ会っていただきたい。

○就農相談があればインキュベーションやファーマーズスクールを紹介しているが、まだ全然決めていないという方には農大の研修部を積極的に紹介している。せっかく地元で農大があるので、農大で研修してもらって豊後大野市に就農してもらいたい。

→就農希望者のミスマッチを防ぐためには、それぞれの特性や希望に合わせたきめ細やかな情報提供と支援が不可欠である。本校の研修が、就農希望者と産地双方にとって最適なマッチングを促進する機会となるよう、引き続き取り組んでいきたい。

○数値目標は2つあり、進路内定率100%と就農率80%以上。自己評価について就農率しか扱われないのはどうかと思っている。進路内定率は100%と非常に高く、かなり一生懸命されているところが評価されないのはどうかと思っている。

○農学部では卒業生の87%が、関連産業含めて農業関係に行っている。研修部もちょうど87%。87%の学生、研修生が農業関連に就職しているということを見れば頑張っていると思う。就農を雇用就農と自営で分けているが、雇用就農もサラリーマンと考えるなら、農業関係に就職していれば、数字に含めてもよいのではないかと個人的には思う。

→9ページにある卒業生のフォローアップ指導ということで、卒業生が職を辞めた時にまた農大に来てもらえれば次の職を斡旋できるのが一番の強みである。

○高校でも就職率、進学率100%を目標にするがなかなか難しい。その中でできているのは素晴らしいと思うので、自己評価は3であるが、委員評価については2としたい。

・カリキュラムの再編について

～事務局から説明～

○カリキュラムを再編することによって教員の必要数は変わるのか。

→今のところ必要数は変わらないという前提。外部講師の数が減る可能性はある。

学生をどう育てるのか、それに向けてどのようなカリキュラムを学ばせるのかという観点で、カリキュラム編成にあたった。一番は、今現場で求められる技術や資格、スマート農業やGAPなどの学びを強化したい。そこで、学生が主体的に農場をどう計画的に運営していくかという「農場運営演習」や、学生が主体となってGAP手法を実践していく「GAP演習」の科目を新設し単位として認めていく。

もう一つは、研修体系で、指摘の多い1年生の10月の先進農家研修を見直し、非農家の学生は増加していることから、入学してすぐのタイミングで農家研修を実施。農大が選んだ研修先に学生を預けて、現場の実態や課題など実際やっている経営者の方から話をしてもらい、そこで意識付けしてもらおう。これにより自分のやりたいことや進路について意識付けしてもらっていく。

また、海外研修を見直し、進路先が多様化している中、自主企画研修として自分に必要なことを自分で企画する研修としていきたい。このためには、講義のコマを空けていく必要がある。科目を整理した中で自由度を持った研修体系に組み替えていきたいと考えている。

○大変難しいところを頑張って取り組まれたなという印象がある。特に農家研修を同じ時期に全部しないと他の先生との調整もあるので、それを一斉にしないというのは相当難しいと思っていた。

それから演習も素晴らしいと思っている。以前、宮崎県にある宮崎中央という優秀な農協で、一年で完全な農家を作るというJAの研修があり、行ってみたらみんなが買う肥料について入りと出をきちんと書くようにしていて、どのくらい経費がかかっているのかが分かるように実践的な研修をしていた。今回の農大の演習でもそんなお金の計算を一緒にやっていただけのならとてもよいと思った。

→実際に計画を作るところを学生に主体的に取り組ませないと、やらされ感満載になってしまう。自分が作った計画に沿って主体的に実行させないと、今の状況ではなかなかそういう学生には育たないと思う。資材の調達も含めて栽培計画を作れば、いつどの資材が必要か、まとめて買えばコストも安くなるなど、自ら考え、在庫管理や記録をしていく。それはGAPにつながっている。各コースでルールを作ってそれが上手いかなければまたルールを見直していく。学生がそれを主体にやっていればどこに出しても通用する人材が育つと考えている。

学生主体の農場運営や2年生から1年生への引継ぎなど、他の農大ではすでに行われている。山口農大ではGAPの取組を2年生が1年生に引き継いでいるし、鹿児島農大は6月に2年生が1年生に農場の運営を引き継いでいる。それは元のルールや計画があるからできるのだが、他の農大できているので大分農大でできないことはないと考えている。

そこを目指していかないと魅力の向上につながらない。

自主企画研修については、いまのところ水曜日は1日講義を入れないようにして、校外研修やインターンシップ、資格取得などに充てられるように考えている。これも熊本農大では2年前に始めており、単位認定している。

○アンケートの4ページに農業法人、指導農業士、青年農業費、AFFが、学生に身につけて

もりたい能力の中で一番がコミュニケーション能力となっていて、私も本当に大切だと思っている。高校から社会にでた生徒で辞めていくのはコミュニケーション能力のない生徒が多い。農業法人の方も困っているだろうと思う。

○企業全体がそうだと思う。地元の企業と話をすると、従業員とコミュニケーション取れないと辞めていくという話だ。

→自分の意思を持っているかどうかだと思う。意思がないと発信できない。発信すること自体スキルがあると思うが、その中に自分の核となるものがないと言葉に出ない。その核を持つためには、現場に行ってみて自分で感じるしかない。感動を伴うような取組、仕掛けをしていって、機会をどんどん与えていかないと限りは意思が持てない。

色々な性格の学生がいるがまず挨拶をしようと言っている。そうするといつの間にか学生も寄ってきてくれるようになる。やはり先生たちも含め職員が学生への対応を頑張らないと、できない学生はそのままになってしまう。

入学して2年間して就職で苦労している学生もいるが、できるだけ内々に入らないように外に出していく。段々と、一人でしか行かないような環境に出していく訓練をさせていかないといけない。進路コーディネーターを見ていると、学生にじわじわとそういう訓練をさせている。そういう訓練は講義というよりも普段での行動が重要と考えている。

○先日、指導農業士の研修で研修部の研修生との情報交換会や去年開催した女子学生との交流会とか、そういう場を設けて、外の人と話す機会を与える。そういう場に出してコミュニケーションせざるを得ない状況に置いてみた方がよい。

○あまり過保護にしてはいけないと思うが、最初はどうしても手を差し伸べないといけない。そこからどうやって手を離して自分で動かせるようになるかが大変だ。周りを上手く使わないとできないと思う。

○高校の立場から言うと、やはり生育環境などもあって生徒それぞれだ。農大にはカウンセラーはいるのか。

→定期的にカウンセラーに来ていただいている。

○上手くカウンセラーを活用していただきたい。学校もカウンセラーをどこの学校も活用している。また、カウンセラーの他にスクールソーシャルワーカーが必ずついている。今年もスクールカウンセラーを増やすようになっている。学校の教育だけではなくて心理的な部分があり、人と出会ったら何とかなるものではない。現代社会において、対面でのコミュニケーション機会が減少している傾向が見られる中で、社会で求められるコミュニケーション能力を育成するための体系的な教育や実践の場を提供することが重要である。この成果はかなり出ている。今の生徒は、自分たちは小さい頃は遊ぼうと思ってもゲームもないし、誰か人を捕まえて遊ぶしかなかった。ところが今はゲームで遊べるから人と付き合っていない。だから元々コミ

コミュニケーションが取れない。それを取れるようにするのは訓練するしかないので、今、学校現場ではそういうことまでやっている。その辺の現状を知っていただきたい。コミュニケーションが取れないというのはそういうことだ。だから先ほど言われたように、色々な人と出会って自分の意見を言う、人の意見を否定しない、そういった取組をしていかないと意見を言えなくなる。否定しないというのは大事だと思う。否定すると自分の周りは目上なのでどうしても委縮してしまう。農大でどう取り組んでいくのか期待している。

以上